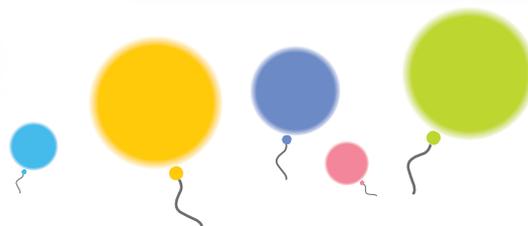


つぶやき



向き合う時間

沖縄県高等学校障害児学校教職員組合 大城 房美

私は、この3月に退職した。20年間、高教組の「親と子と教職員の教育相談室」で活動してきた。当初は、電話相談を中心に親や子どもたちの悩み相談を受けていた。さらに、教育相談員の先生方の資質を高めるために、夏休みや土・日に研修会を開いた。ニーズがあったので、毎回多くの先生方が研修に参加してくれた。10年前から参加者も少なくなった。その理由は、研修の機会が他の機関でも多く開催されるようになっていたからだ。悩み相談も、色んな相談窓口が増えてきた。私達の活動は、5年前から休会状態でもう終わったのかもしれないと思った。去年、高教組から電話があり、その当時一緒に活動していた4人が集まった。そこで、また自分達にできることから、活動しようということになった。沖縄県の教職員は精神疾患で休職する率が全国でも高いということから、教職員に向けての悩み相談の活動はできないかということになった。全国の親と子と教職員通信「教育相談室だより」を組合分コピーして配布することにした。教職員を元気にすることが、生徒を元気にすることではないかと考えたからだ。

私が、教員になった37年前は教育現場はもっとゆったりしていて楽しかった。当時は「主任制導入」があり皆で反対した。運動は苦しかったけど連帯している感じで頑張れた。いつの間にか職場には、コンピューターが入り提出する文書が増え、パソコンと向き合う時間が長くなった。教師同士で話し合ったり、生徒とのコミュニケーションの時間が削られた。学校現場は「ブラック企業化」してきた。組合員も減り、組合活動もできなくなった。日本の教育はどうか。気持ちは暗くなっていった。

しかし、私は教職最後の年を高校3年生の担任で締めくくった。卒業生を見送って、やはり生徒との関わりは楽しいと思った。生徒達の成長を見る事のできる教師という職業はやりがいがあると思った。忙しい中でも生徒と向き合う時間の楽しさをあらためて感じた。国の未来を作るのは教育しかないと考えている。それに携わることのできたことは幸いであったと思う。若い教師たちがもっとゆとりを持って生徒やお互い同士が付き合える環境作りができればいいと思った。